

願泉寺表門の彫刻

願泉寺の表門の修理がすすめられています。現在は工事用の素屋根で覆われており、足場が確保されているため、普段は遠くからしか見ることができない場所にある彫刻などを間近で観察することができます。また、一部の彫刻については修理のために取りはずされています。今回は、これら表門の彫刻類を紹介します。

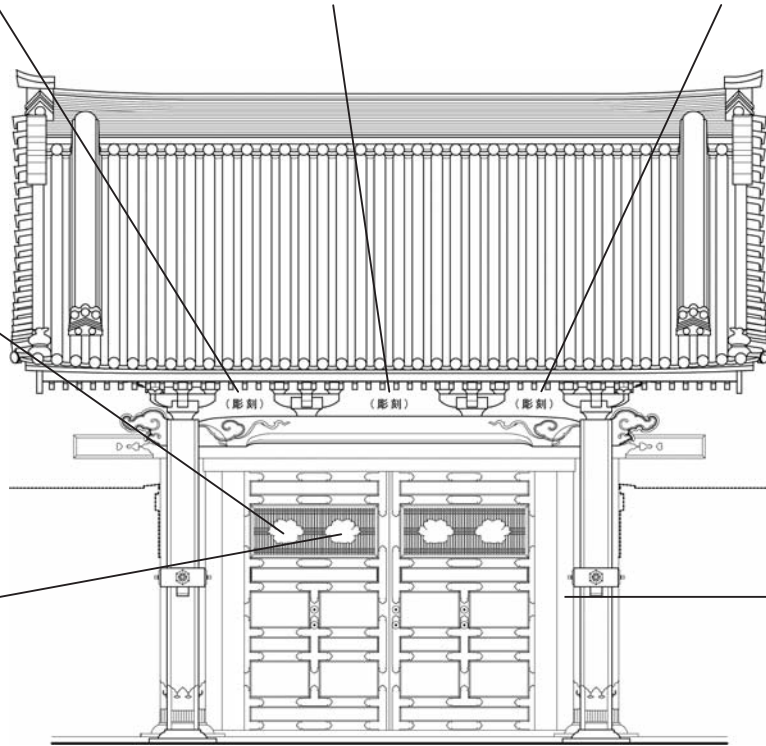
表門の彫刻類の中では、長押（なげし）という部分の上に備えつけられている龍の彫刻（テンプス38号表紙参照）が有名ですが、それ以外にもさまざまな彫刻があります。虹梁（こうりょう）の上部の狭間板（さまた）という部材には、空想上の動物の彫刻がほどこされています。正面には獅子（しし、3組）、背面には麒麟（きりん、3組）、側面北側には海馬（かいば、2組）、側面南側には飛



正面狭間板の獅子の彫刻



大扉の菊の彫刻（上）と大扉脇の菊と唐草の彫刻（右、部分）



背面狭間板の麒麟の彫刻

※（図面提供）公益財団法人 文化財建造物保存技術協会

龍（ひりゅう、2組）があります。

また、大扉やその周辺部分には菊や唐草、雲などの彫刻が備えつけられています。これらの彫刻については、願泉寺に残された古文書により、安政6（1859）年に岸和田大工卯蔵（うぞう）の手によって製作されたことが明らかになっています。



側面北側の現状（左）と側面北側狭間板の海馬の彫刻（中・右）



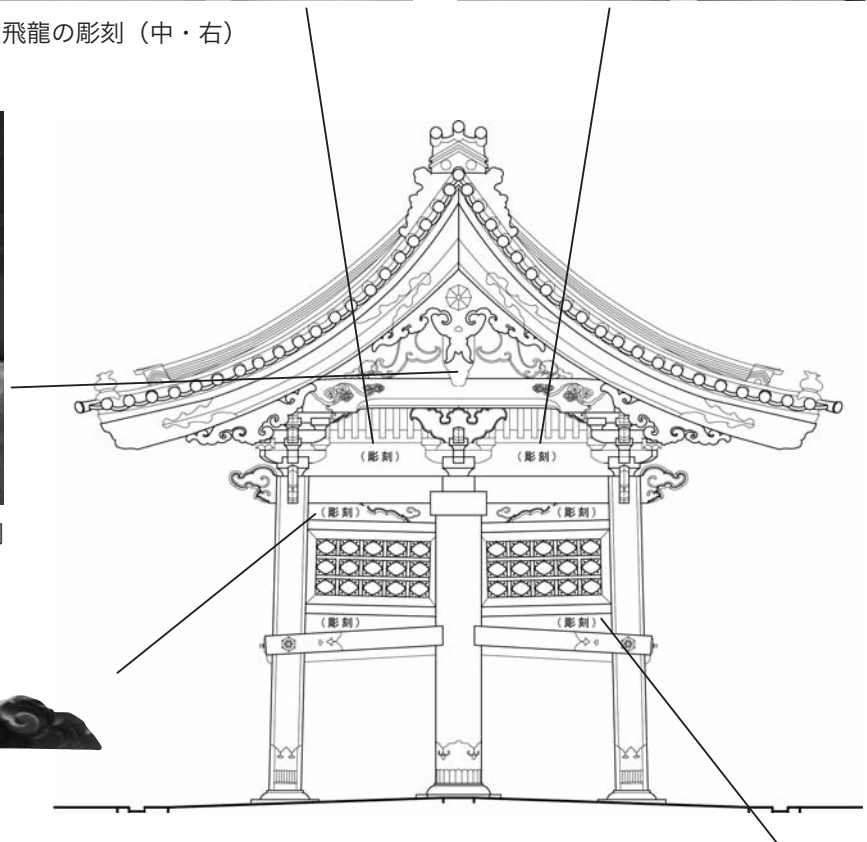
側面南側の現状（左）と側面南側狭間板の飛龍の彫刻（中・右）



側面にほどこされた鬼の彫刻（写真は北側のもの）



肘木（ひじき）横の雲の彫刻



腰長押（こしなげし）上の菊と唐草の彫刻

願泉寺表門の石材

平成21年7月に願泉寺表門の4本の控柱（ひかえばしら）を支えていた石材の取り替え作業が行われました。

この石材は、寛政3（1791）年の修理時に新たに入れられたもので、もともと柱は礎石までありましたが、柱の足元が腐っていたために、切断して石を根継ぎ（挿入）したと考えられます。

今回の調査で、この石材が破損していることがわかり、表門全体（6本の柱）を持ち上げる必要がありました。

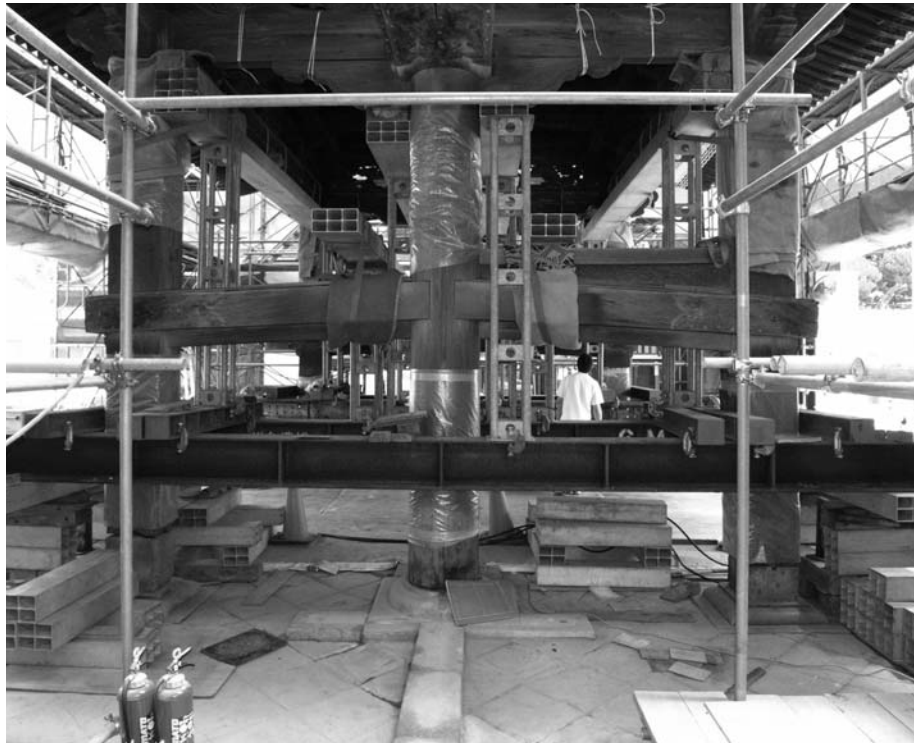
石材を取り替えるために、鉄骨部材などでしっかりと柱

や部材を固定し、油圧ジャッキでゆっくりと持ち上げる揚屋工法（あげやこうほう）が採用されました。表門は、屋根瓦を降ろした状態で重量が約20トンもありましたが、それを高さ60cmまで持ち上げました。

今回、揚屋を行った結果、使用されていた石材で新たな発見がありました。この石材は、幅34cm、高さ21～39cmの四角に加工された花崗岩（かこうがん）でしたが、その上面には十字の浅い溝が彫ってありました。この溝は、控柱と石材の間に細長い角材を差し込み、固定する目的があったと考えられます。しかし、江戸時代の修理では、十分に柱を持ち上げられなかったようで、控柱には石材の溝に合う加工が行われていませんでした。控柱をよく見ると、途中で溝を彫るのをやめており、実際には石材との間に短い角材（上写真参照）を差し込んだだけで修理を終了したものと思われます。

また、2本の本柱の礎石には、柱を接ぎ合わせるための穴が彫られていました。北側の本柱には穴に対応する突起があるものの、南側の本柱にはありませんでした。本柱も控柱と同様に途中で加工作業をやめてしまったのかもしれませんが。

今回の修復工事では、破損した石材を良質のものに取り替え、柱にも溝を彫り、細長い角材を差し込む方法にしました。さらに南西隅の石材は高さが39cmあり、転倒しやすい形状のため、ステンレス製の円柱を差し入れてつないでいます。



表門の揚屋工法の様子



石材に彫られた溝

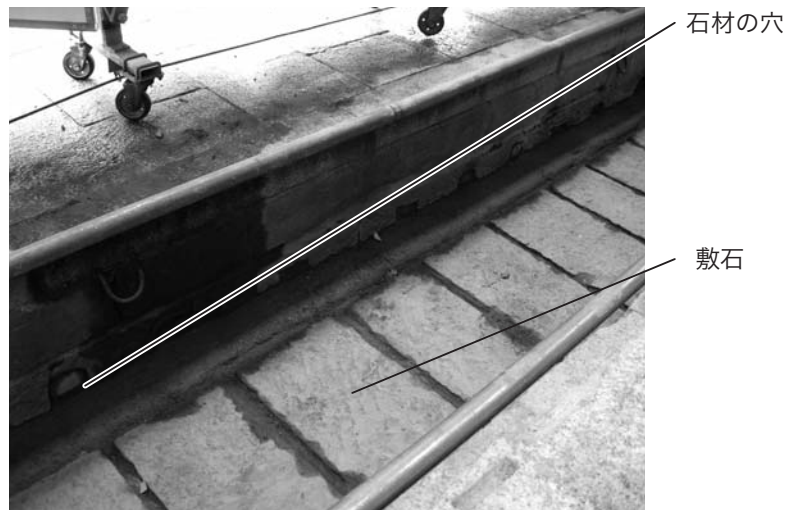
短い角材

願泉寺築地塀前面の側溝の発掘調査

平成21年7月に南築地塀前の側溝の構造を確認するために発掘調査を実施しました。

築地塀の側溝は底部の敷石と南面（寺外側）の石組みで造られており、敷石の南北側は漆喰（しっくい）が施されていました。

側溝の南面は3段の石組みであり、上から3段目の石材に穴があげられていました。穴は一辺約10cmの四角形で、その間隔は、穴の中心から約30cmごとにほぼ等間隔で配されています。



調査前の築地塀の側溝

穴は漆喰で埋められており、側溝の敷石に施されていたものと同質のものと考えられます。この漆喰を取り除くと、穴の奥行きは6～10cmで、穴の断面は台形状でした。

公益財団法人文化財建造物保存技術協会の担当者によると、寛政8（1796）年の『和泉名所図会』に願泉寺の築地塀前に柵が描かれており、この柵の土台となる石材ではないかと想定されています。

石材の穴には、木製か石製の棒状のものを差し込んで柵にしたものと推測され、この柵の土台を側溝の石材として転用した可能性も考えられます。

敷石下の状況については、敷石（長さ60cm、幅35cm、厚さ10cm）3枚分（1㎡）を外して確認しました。

敷石の下は、自然堆積層（地山）面までは、敷石を設置するために約0.25mの盛土が行われていました。この盛土からは、瓦・磁器が出土しており、18世紀後半以降に側溝が設けられたと考えられます。自然堆積面において、側溝の南東側で長軸20cmほどの花崗岩（かこうがん）を発見しました。花崗岩は粘土で固定されているようであり、その東側でも間隔をおいて配置されている可能性があります。



石組みの穴

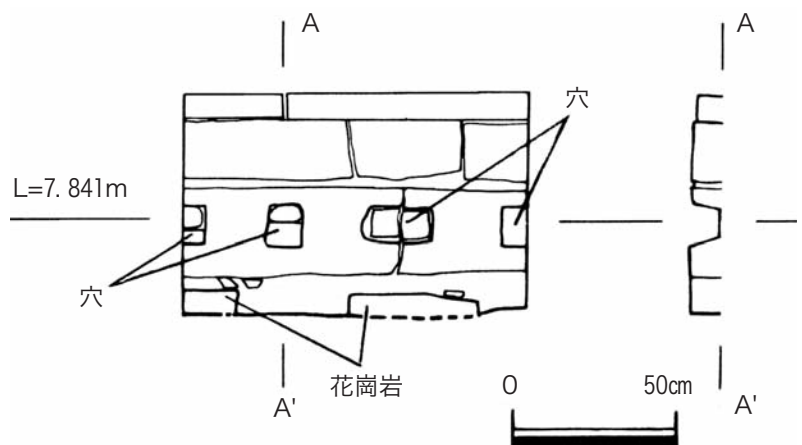


図 側溝南面 断面図

市内の古文書調査から

教育委員会では、貝塚市に関わる古文書を調査し、歴史をひも解く作業を行っています。今回は、昨年度から今年度にかけて調査した南川家文書を紹介します。

◆南川家文書（木積）

南川家は市内木積（こつみ）にある旧家で、江戸時代には「勘兵衛」の屋号を名乗り、代々木積村の庄屋をつとめた家です。岸和田藩の中でも有力な庄屋である「七人庄屋並（しちにんじょうやなみ）」に列せられ、岸和田藩領内村々の利害調整のほか、木積村の村政にあたりました。

同家にのこされた古文書および書籍類を新たに調査したところ、戦国時代から近代にかけての木積村に関する記録のほか、『論語』や『孟子』をはじめ中国の四書五経に関する書籍など460点にのぼる貴重な史料を確認することができました。

これらのなかで最も注目されるものに、戦国時代の根福寺城（こんぶくじじょう）とその周辺に関する記録が挙げられます。この記録によると、弘治3（1557）年10月、松浦孫五郎（まつらまごごろう）が木積に蛇谷城（じゃたにじょう）を築いた^{※1}ことが記されています。

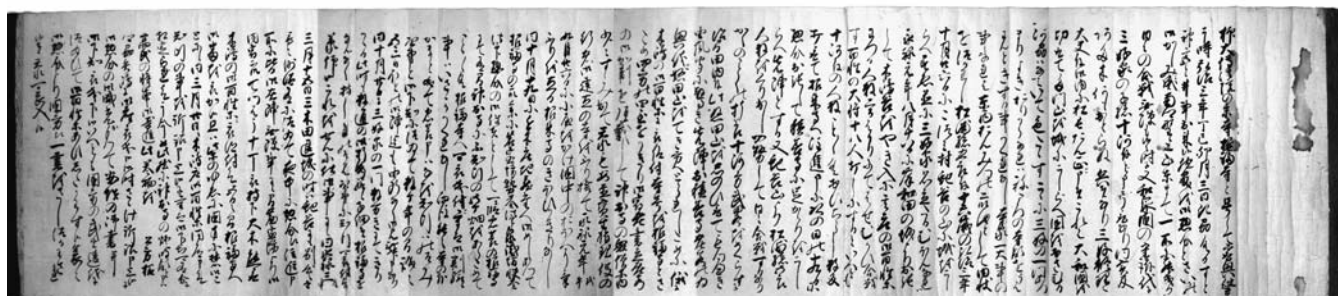
永禄元（1558）年8月には和泉国の守護代^{※2}をつとめていた三好氏と、和泉国南部から紀伊国紀の川筋にかけて勢力を張っていた根来寺とが木島谷（きのしまだに）で合戦におよんだ様子について事細かに描かれています。三好方の武将が、根来の寺領を奪おうとして木島谷を攻撃し、200人ほどの村人が応戦、18人の「百姓の大将」が討ち死にしたものの、三好方を退かせたことのほか、当時「怒田山（ぬだやま）」（＝野田山）と呼ばれる場所にあった城を、この年根来寺の末寺「根福寺」に改称したことが明らかになっています。

また、同じ年の10月には、近木庄（こぎのしょう）地蔵堂^{※3}に「根福寺の衆」が集まり、根来寺の使者を迎えたという記述も見られます。このように、現在の貝塚市域が戦国時代において根来寺の重要拠点であったことを伝える史料がのこされるなど、西葛城地域の歴史を深める上で貴重な史料です。

- ※1 孫五郎の父とされる松浦肥前守守（まつらひぜんのかみまもる）が築いたとする説もある。松浦肥前守守は当時、岸和田城主をつとめるなど、現在の岸和田市から貝塚市にかけて勢力を持っていた。
- ※2 守護の代官のこと。国内の武士の組織化をおこない、下剋上によって領主化し大名になることも多かった。越前の朝倉氏、尾張の織田氏、越後の長尾氏などは守護代から戦国大名になった。
- ※3 地蔵堂とは現在の貝塚市地蔵堂にある正福寺の古い呼び名。



古文書が納められていた木箱
箱の表には「弘化二乙巳年十二月/鉄炮百人組/惣頭南川勘兵衛」と墨書きされている。



根福寺城とその周辺に関する記録

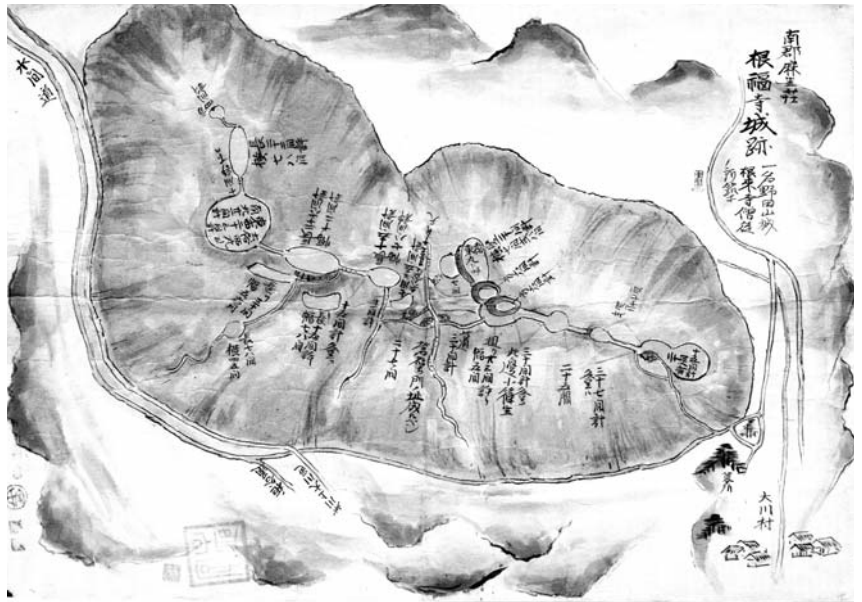
古絵図をひも解く

◆根福寺城（こんぶくじじょう）絵図（岸和田市教育委員会所蔵）

右の絵図は、現在の貝塚市梶谷（きびたに）に位置する戦国時代の山城、根福寺城を描いた絵図です。

右下に大川村の集落、中央に根福寺城、根福寺城の外縁にそって街道「水間道」「梶谷道」と河川（近木川・梶谷川）が描かれています。山は緑色、川は水色、街道や山の尾根に築かれた城郭部分は黄色に着色されています。

また、この絵図が江戸時代に作成されたものであるため、「城跡」の表記のほか、「砦（とりで）壁門



址（あと）」「矢倉台」などの痕跡が描かれており、城の大きさや距離がこと細かく記されている特徴もっています。また、右上に「根来寺僧徒ノ所築」とあり、根来寺勢力の拠点として橋本の積善寺（しゃくぜんじ）城とともに根来衆の城と位置づけられていたことがはっきりします。16世紀中期、水間や岸和田から紀州へ向かうルートであったことから、この地域を治めようとする三好氏の勢力と根来寺の勢力とが激突することとなり、この城の攻防が地域を支配する上で重要視されていたのでしょう。

◆古文書講座（第33回）開催のお知らせ

「岸和田藩の七人庄屋－苗字・帯刀と格式－」

江戸時代、岸和田藩では領内の最も有力な庄屋七人を選び、その者たちを「七人庄屋」と呼び、領内村々の支配の一部を担当させました。七人庄屋は岸和田城内の「郷会所」へ月に数回集まり、藩からの触れを村々に伝達したり、村々からの願書や訴状を藩に届けるなど、村々の利害調整に奔走しました。

こうした働きへの功勞として、藩から様々なほうびが与えられました。藩主に対する年頭・暑中・寒中・帰城などの節のあいさつ、武士に認められている帯刀や、苗字を公式に名乗ることが許されるようになりました。どのようにして、苗字・帯刀などの特権が許されていくのか、当時の古文書をテキストにそのしくみを探っていきます。

日 時：平成22年1月9日－第1回、1月16日－第2回、1月23日－第3回、
1月30日－第4回、2月13日－第5回、いずれも土曜日午後2時～4時30分

場 所：貝塚市民図書館2階視聴覚室

申 込：住所、氏名、電話番号を明記の上、はがき・Eメール・FAX・電話
いずれかで、下記まで事前にお申込みください。

連絡先 〒597-8585 大阪府貝塚市畠中1-12-1（貝塚市民図書館2階）貝塚市郷土資料室
TEL 072 (433) 7205 / FAX 072 (433) 7107
Email shiryoushitsu@city.kaizuka.lg.jp

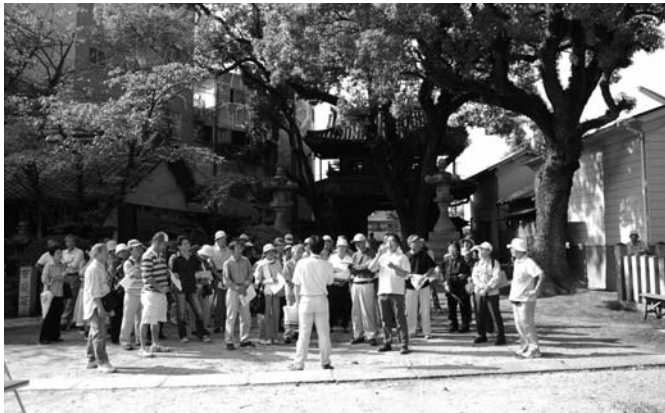
「重要文化財願泉寺と貝塚寺内町 現地見学会」を開催しました

10月3日（土）に「重要文化財願泉寺と貝塚寺内町 現地見学会」を開催しました。

当日は、願泉寺境内にて現在修理中の本堂、表門、鐘楼に続いて、感田神社を見学した後、寺内町地域に残る登録有形文化財の町家11軒をまわりました。今回は、まる博'09「貝塚寺内町と紀州街道まるごと博物館」開催期間中であるため、並河家、利齋家、岡本家、吉村家、名加家については、主屋部分の土間や店の間など、建物内部についても見学することができました。

今回の見学会は、市内外から104名のみなさんにご参加いただきました。

参加者の方からは、「ふだん見ることのできない町屋の内部まで見学させていただき良かった」、「貝塚にもまだ古い町家がこんなにも残っていたのを初めて知りました」といった感想をいただきました。また、「願泉寺の本堂内部も見せてほしかった」、「孝恩寺や水間寺など山手地域の見学会も企画してほしい」という意見もいただきましたので、今後はこれらの見学会についても企画していきたいと思えます。



※願泉寺は現在も重要文化財建造物の修理が進められているため、通常は見学できません。

まる博'09 「貝塚寺内町と紀州街道まるごと博物館」の写真

10月3・4日の二日間、旧貝塚寺内町地域において、貝塚寺内町と紀州街道まちづくり協議会の主催で「まる博'09」と題するイベントが開催されました。このイベントでは、貝塚寺内町と紀州街道の文化財建造物の一部を公開し、まちかどギャラリーを設けて、町全体がまるごと博物館になりました。



かいつか文化財だよりテンプス39号

平成21年10月30日発行

貝塚市教育委員会

〒597-8585 貝塚市畠中1丁目17-1

Tel (072)433-7126 Fax (072)433-7107

Email : shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

印刷 (株)和歌山印刷所

※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。

年4回発行：各1,000部

印刷単価：67.20円

